絵画印象における評価性因子構造

○長 潔容江¹・原口雅浩²

(¹九州大学大学院人間環境学府・²久留米大学文学部)

キーワード：評価性，SD 法，形容詞対

Structure of Evaluation factor on the impression of paintings.

Kiyoe CHO¹, Masahiro HARAGUCHI²

(¹Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu Univ., ²Faculty of Literature, Kurume Univ.)

Key Words: evaluation, Semantic Differential Technique, adjective pair

目 的

絵画印象を評定する尺度は，SD 法がよく用いられており，評価性，力量性，活動性の 3 因子によって構成されるものが多い。その中でも評価性因子に関しては，これまでの研究でそれがもつ多次元性についてしばしば指摘されている。

Berlyne (1974) は，「面白さ」は評価性因子ではなく独立した因子であると指摘し，筒井・近江 (2009) は，「面白さ」は美的評価であるヘドニックトーンとは異質であるが，「楽しさ」と密接な関係があると指摘している。このように，「ヘドニックトーン」と「面白さ」と「楽しさ」などの項目を含む評価性因子は，複数の次元から構成されている可能性がある。

そこで本研究では，評価性因子に焦点を当て，快いー不快な，美しいー醜い，良いー悪い，好きなー嫌いな，面白いー面白くない，楽しいー楽しくない，これらの 6 項目を対象に，評価性因子の構造について検討することを目的とした。

方 法

調査協力者：大学生および大学院生 64 名（男性 21 名，女性 43 名）に調査に協力してもらった。

評定尺度：絵画の評価を測定する項目として，快いー不快な，美しいー醜い，良いー悪い，好きなー嫌いな，面白いー面白くない，楽しいー楽しくない，形容詞対 6 項目を使用した。尺度の評定方法は，SD 法による 7 段階評定であった。

絵画刺激：Marković & Radonjić (2008) を参考に，Figural Realism (6 枚)，Abstract Art (6 枚)，計 12 枚の絵画を用いた。

手続き：調査用紙と A4 の用紙にカラー印刷した絵画を配付し，評定してもらった。

結 果

評価性因子の形容詞対 6 項目のデータを，形容詞対×（絵画×調査協力者）の 2 相のデータに構成し，最小二乗法，プロマックス回転による因子分析を行った。抽出する因子数を 2 に指定した結果，第 1 因子（美しい，良い，快い，好きな）と第 2 因子（面白い，楽しい）の 2 因子に分かれた。続いて，抽出する因子数を 3 に指定した結果，第 1 因子（美しい，良い，好きな，快い），第 2 因子（楽しい），第 3 因子（面白い）の 3 因子に分かれた。

次に，6 項目のデータで相関分析を行い，1 から相関係数を引いた非類似度データを用いて，Ward 法によるクラスター分析を行った。

図 1 は，評価性因子のクラスターを表したものである。なお，横軸は非類似度を示す。図 1 のデンドログラムから，主観的に 3 つのクラスターを抽出した。クラスター 1 は（美しい，クラスター 2 は（好きな，良い，快い），クラスター 3 は（楽しい，面白い）であった。

クラスターの階層構造は，まず，「良い」と「快い」，次に

「好きな」（クラスター 2），さらに「美しい（クラスター 1）」が結びついた。また，「楽しい」と「面白い」が結びついた（クラスター 3）。クラスター 1 とクラスター 2 が結びつき，最後にクラスター 3 と結びつくという順序でクラスタリングされた。

図 1 評価性因子のデンドログラム

考 察

因子分析およびクラスター分析の結果から，評価性因子の項目は，「快さ」や「美しさ」などの美的な評価に関する項目であるヘドニックトーンと，「面白さ」や「楽しさ」など嗜好の評価に関する項目の 2 つに大別されることが考えられる。

また，クラスター分析の結果では，嗜好に関する項目が「楽しい」および「面白い」がまとまり，筒井・近江 (2009) を支持する結果となったものの，非類似度の値が高く (0.457)，因子分析で 3 因子を抽出した場合，2 つの因子に分かれたことから，「楽しい」および「面白い」は，次元が異なる可能性がある。

以上の結果から，評価因子は，「ヘドニックトーン（快い，良い，美しい，好き）」、「面白さ」，「楽しさ」の 3 側面から構成される可能性があると言える。

しかしながら，「快さ」は他の項目と比較して安定していること (Russell & George, 1990) や，「好ましさ」は非常に多次元的であることが指摘されている (筒井・近江, 2010, Russell, 1994)。これらの知見から，統計的には同じ構造であると処理された項目でも，人間の内的な処理過程においては差異が存在する可能性が考えられる。

引用文献

Marković, S. & Radonjić, A. (2008). Implicit and explicit

Features of paintings. *Spatial Vision*, 21, 229-259.

筒井亜湖・近江源太郎 (2009). 視覚造形における美的評価尺度の検討 女子美術大学研究紀要, 39, 96-105.